

## 「同じであること」を根っこに違いを包摂する ——外国につながる子どもに対する保育士のまなざし——

### Including Differences Rooted in Sameness: The Gaze of Childcare Workers toward Children with Foreign Backgrounds

當銘 美菜  
(Mina TOME)

#### Abstract :

This paper aims to clarify the aspects of their work that childcare workers value with respect to the past, present, and future, based on interviews with childcare workers who have experience working with children with foreign backgrounds. The discussion focuses on the possibilities and challenges of embracing differences.

The results of this study demonstrate the process through which childcare workers alter what they value in their work. They initially valued childcare in which special consideration was given to differences and individuality. However, they subsequently began to value childcare in which the focus was on sameness, and then childcare in which differences were embraced on the assumption that they are rooted in sameness. Childcare that embraces differences based on the assumption of sameness is enabled by childcare workers' gaze toward the children. In this context, the gaze of each of us is being examined so that differences will be embraced as they are, without exclusion, and children will not be made invisible.

**キーワード** : 保育士、外国につながる子ども、同じであること、まなざし、ビジュアル・ナラティブ

**Keywords** : children workers, children with foreign backgrounds, sameness, the gaze, visual narrative

本稿では、外国につながる子どもを保育した経験のある保育士へのインタビュー調査から、過去—現在—未来の3つの時間軸において、保育士が保育の中で大切にしていることを明らかにすることを目的に、そこから示唆される包摂の可能性と課題について論じた。

保育士が保育の中で大切にしていることが、差異に配慮した保育や個性性を意識した保育から、「同じであること」を意識した保育へ、さらに、「同じであること」を根っこに「違い」を包

摂する保育を志向するという変化の過程が明らかになった。「同じであること」を根っこに「違い」を包摂する保育は、保育士の子どもたちに対するまなざしにより支えられていた。「違い」が排除されることなく、「違ったままで」包摂され、子どもたちが見えない存在となることがないよう、私たち一人ひとりのまなざしのあり方が問われている。

## 1. 問題の所在

日本の学校におけるニューカマーの子どもの見えにくさ(志水・清水2001; 渋谷2013)が指摘されて久しい。「現在では、幼少期から日本文化の中で育ち、日本名で生活する子どもたちが多数を占めており、ニューカマーの子どもたちに固有の教育的ニーズが不明確になってきている。日常会話の流暢さゆえに見逃されて、学習言語としての日本語につまずく子どもたちはあとを絶たない。」(渋谷2013: 1)という状況は、なお継続している。また、生育の背景や言語能力、家庭環境などの違いにより多様化している子どもたちを、一括りにして捉えることができます難しくなっていることも見えにくさを助長しているといえる。

日本の学校現場では、1990年の「出入国管理及び難民認定法(入管法)」の施行に伴い増加したニューカマーの子どもたちの受け入れ期から、「一斉共同体主義(恒吉1996)」や「奪文化化教育(太田2000)」等、同質性を前提とした教育のあり方が問題視されてきた。保育現場においても、子どもたちにとって「望ましいこと」だとして『日本人化』につながる保育が実践されていることが指摘されてきた(小内2003)。

外国につながる子ども<sup>1)</sup>の受入にあたっては、言語や文化の違いに起因する困難さを抱えている園もある一方、子どもはすぐに慣れるので問題ないという声も根強いが、日本語指導の必要な児童生徒数の増加をはじめとする就学後の課題の深刻さから、就学前からの支援の必要性も指摘されている。特別な教育的配慮や支援が必要な子どもたちが見えない存在となっている場合、その理由を探る必要がある。そこで本稿では、外国につながる子どもを保育した経験のある保育士2名を対象に行ったインタビュー調査から、過去—現在—未来の3つの時間軸において、保育士が保育の中で大切にしていることを明らかにし、そこから示唆される包摂の可能性と課題について論じる。

## 2. 調査の概要

### (1) 調査協力者

本稿では、保育者としてのキャリアの中で、

外国につながる子どもを保育した経験のある保育士2名を対象に、①イメージ画の描出と、②イメージ画を手がかりに行ったインタビュー調査の結果をまとめる。調査は、2022年8月と9月に1名ずつ、対面で実施した。調査にかかった時間は、①と②を合わせて、120分程度であった。

### (2) 方法

本稿では、①イメージ画の描出と、②イメージ画を手がかりにしたインタビュー調査を実施した。やまだ(2018)は、「ビジュアル・ナラティブは、視覚イメージによって語ること、あるいは視覚イメージとことばによって語ること」であり、「感性や直感によって伝える形式」だと述べている。視覚にも働きかけることで、視覚的なイメージが触媒となり、言語のみの語りとは異なる多様な語りや意味づけが生まれ得ることから、言語化に至っていない、あるいは、意識化されていないわけではない保育士の保育観を捉えることができるのではないかと考え、本方法を採用した。

イメージ画は、横山ら(2020)を参考に、①保育者養成校で学んでいた頃、②今現在、③これからの将来の3つの時間軸において、ご自身が保育の中で大切にしていたこと(いること/いるだろうこと)をイメージし描出してもらった。また、インタビューの過程で、イメージ画の簡単な解説を書き加えてもらった。その文字説明の中にある下線は、調査協力者がキーワードとして選択し、引いたものである。なお、調査の実施にあたっては、得られたデータは倫理的な配慮をし、個人情報保護することなどを口頭及び書面により説明し、同意書への署名を得た。

## 3. 調査結果

### —保育の中で大切にしていること—

外国につながる子どもを保育した経験のある保育士は、保育の中で外国につながる子どもをどのように眼差し、どのような関わりを心掛けているのだろうか。以下では、両名の語り<sup>2)</sup>から、それぞれが保育の中で大切にしていることについて記述する。

## (1) Aさん

Aさんは、保育士になるという夢を抱き、保育者養成課程のある大学に入学し、卒業後は公立保育士として勤務している。自身も外国にルーツをもつ子どもとして、幼少期を過ごした。①（保育者養成校で学んでいた頃に大切にしていたこと）のイメージ画（図1参照）について、「例えば、外国籍の子どもは周りとは違うからいじめられやすいとか、世間的にもそういう認識があるから、保育士がその子に寄り添いながら様子を見て、接して行くみたいない感じで。（中略）保育士が外国籍の子どもの様子を気にかけながら寄り添って遊ぶみたいなイメージで描きました。」と説明した。

このようなイメージは、幼少期の頃の経験が影響している。Aさんは、保育園に通っていたが、当時自身のルーツについてはあまり考えたことがなかった。しかし、小学校に入学後、髪の毛や運動能力について周りの人たちから、他と違うということを指摘され始め、初めて自身のルーツを意識するようになる。良い思いをすることもあったが、嫌だなと思うことも結構あり、親や担任の先生に相談することもあった。このような経験から、イメージ画の保育士もまた、「話を聞いてくれる存在って感じ。寄り添ってくれる、傍に居てくれる感じ。何かあった時に守ってくれる存在」として描かれている。



図1 Aさんが保育者養成校で学んでいた頃に大切にしていたこと

①のイメージ画では、「保育者が外国籍の子どもの様子を気にかけながら寄り添い遊ぶ」という言葉が添えられているが、Aさんは、保育

士として働き始めてから、保育所には「本当にいろんな子がいて、外国籍だけじゃない。それこそ、手が出やすい子だったり、家庭環境があまり良くない子だったり、気にしなきゃいけないことがたくさん」あることに気づいた。そのため、②（今現在、保育の中で大切にしていること）のイメージ画（図2参照）に対しては、「保育士が気にすると子どもたちも気にしちゃう、そんな感じがあって。だから『みんな一緒、みんなそれぞれ違うし、一緒に遊べる友だちだよ』っていうのを伝えたいな。（中略）いろいろ違う子も保育所で一緒に楽しむ生活っていうか、遊びを楽しむみたいない感じだったので、これを描きました。」と説明した。

保育学生だった頃は、子どもと一対一で関わるのが基本と考えて、実習などで出会う子どもたちを気にかけて見ていたが、保育士として勤務するようになり、みんなのこと、全体もみなければいけないという感情・気持ちの変化、考えの変化があった。勿論、Aさんにとって、子ども一人ひとりと関わることは大切で必要なことなのは変わらない。自分から助けてほしいということを発することが難しい年齢の子どもの場合、保育士がその様子を見て、気づいていく必要がある。しかしそれは外国につながる子どもだけではなく、全員が助けてほしいと感じる場面がある。そのため、保育士は特別に、「外国につながる子ども」や「障がいを持っている子ども」だけではなく、「それぞれ個人、個人、全員を見ながら、この子には今この配慮が必要とか、この子には今この助けが必要とか、それを判断しながら動いていくのがいいんじゃないか」と考えるようになった。イメージ画には、「外国籍だからと特別気にするのではなく、肌の色・・・関係なくみんなで一緒にあそんで、一人の友だちとしての輪を広げる」と添えられている。

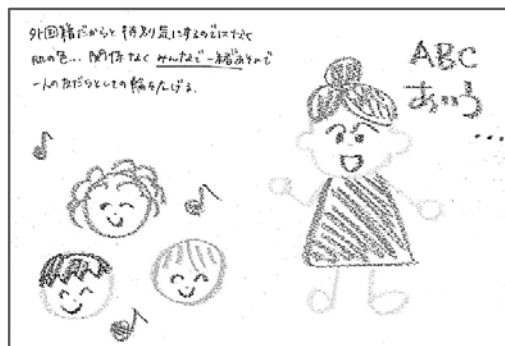


図2 Aさんが今現在、保育の中で大切にしていること



図3 Aさんがこれからの将来、大切にしているだろうこと

③（これからの将来、保育の中で大切にしているだろうこと）のイメージ画（図3参照）に、保育士としてのAさんは描かれていない。Aさんは将来、保育士が子どもに関わるだけではなく、保育士が用意した玩具等の環境に子ども自ら関わっていく保育を実践していきたいと考えている。その保育の過程で、さまざまな言語の歌や、肌の違う人形などを取り入れ、違いが外国籍の友だちとの間にだけあるのではなく、歌や人形等の玩具にもあるということを、遊びや環境を通して学べる可能性について検討している。

例えば、今の1歳児が3歳児になった際にクラスを担当するかもしれないと考えた時、遊びを通して、自分が実は外国籍だということに気がつく子どもがいるかもしれない。クラスメイトも次第に、この子は自分とは違うということを知ってくる年齢になってくる。Aさんは、外国籍の子どもが、保育室に置かれている人形の皮膚の色が自分と同じだと気づくことと、クラスメイトのみんなが、他と違うところがある人形を、その違いに気づいたうえで大切に使って遊ぶということの両方が生まれる保育を大切にしたいと考えている。イメージ画には、「外国の文化（日本も含）に親しみながら、お互いを理解していけるような保育」と添えられている。

## （2）Bさん

Bさんも、保育士になるという夢を抱き、保育者養成課程のある大学に入学し、卒業後は公立保育士として勤務している。①（保育者養成校で学んでいた頃に大切にしていたこと）のイメージ画（図4上参照）について、「何か自分が伝えようとしているんだなっていうのが、ジェスチャーは分かりやすいかなと思って。心を開くというか、関われるきっかけになるんじゃないか」と説明している。Bさんは、外国につながる子どもに対する保育においては、いくつかの段階があると考えている。外国につながる子どもたちと関わる時やコミュニケーションを取る時に、言語が通じない子どもは多いと思うが、その時に保育士がどんなに必死に話しても、それだけでは思いが伝わらないため、例えば身振りやジェスチャーを使うという段階があるという。第一段階で、自分と一緒に関わりを持ちたいんだなということが十分に伝わったら、次にもう一歩先の話題として、「どんなことが好き？」といったやりとりが可能になる。

図4下のイメージ画については、「なんか言語って、やっぱり壁がちょっとあるように感じるけど、絵とかだったら世界共通で伝わるから、こういうカードを見せて何が好きとか、コミュニケーション取りやすいなと思って。あと、保育士が示すだけでなく、例えば白紙を渡したら、自分の好きなものを書いてくれたりして。ああ、これ知ってるとか、私もこれ好きとか、そういうコミュニケーションの取り方ができるかなと思いました」と説明している。

ただし、最初からカードを使うのではなく、子どもの様子を見ながら少しずつ距離を縮めていきたいという思いがある。そのため、第一段階では、ジェスチャーを使って、手を取って、という方が思いが伝わりやすいため、安心だと考えている。

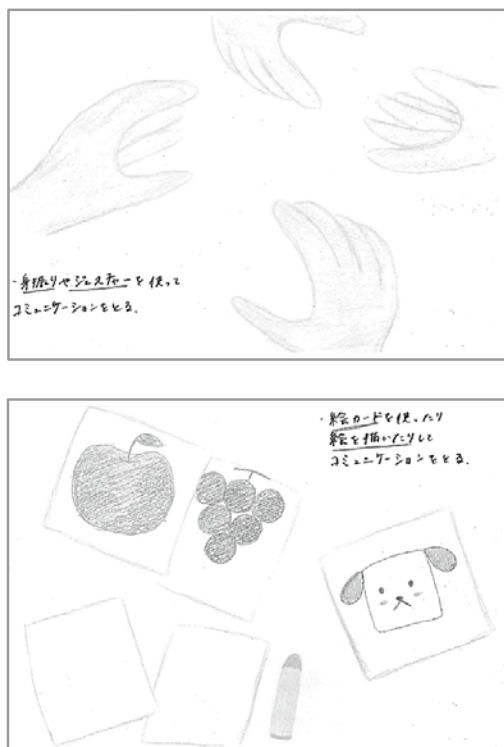


図4 Bさんが保育者養成校で学んでいた頃に大切にしていたこと

②（今現在、保育の中で大切にしていること）のイメージ画（図5参照）に対しては、「（外国につながる子どもに）配慮するところもあると思うんですけど、そういう配慮ばかりしていて、同じクラスの他の子どもたちがそれを目にする機会が多いと、『あの子は自分たちと違うのかな』と感じてしまうかもしれない。どの子どもにも同じように接していくことで、「同じクラスのお友だちなんだ」というのを感じてほしい。そこで壁を作ってほしくないというのが、今クラスを持って感じることもあり、こういう画にしました」と説明している。Bさんは、このイメージ画に「日本人の子も外国の子も平

等に接する」という言葉を添えている。「平等に」というのは、外国につながる子どもにも日本語で話すということではなく、同じように楽しく遊びたいということである。その子だけに配慮が必要ということや、その子はみんなと違うんだということを他の子どもたちに示したくないという気持ちがある。「同じクラスのお友だちということを大事にしていきたい」と考えている。

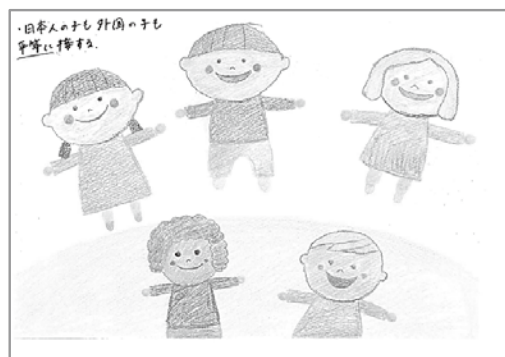


図5 Bさんが今現在、保育の中で大切にしていること

Bさんは、③（これからの将来、保育の中で大切にしているだろうこと）のイメージ画（図6参照）に対して、「保護者の方も不安だと思うんですよ。日本にいて言葉も分からない中、日本人の子ばかりいる園で、自分の子どもがどうなのかと、これから。保護者自身もどうやって他の親御さんと関わっていけるか不安だと思うので、子どもだけじゃなくて、やっぱり保護者とのつながりも大事、つながっていけたらいいな、自分がそういうつなげる役割を担えたらいいなと思って」イメージ画を描いたと説明している。保育を考えていく上で、保護者とどうコミュニケーションを取っていくかは重要である。翻訳機を使ったり、保護者の母語と日本語の分かる親戚の方を介して話をしたりと、いろいろな手段を使って理解を深めていきたいと考えている。Bさんは、このイメージ画に「保護者との繋がりも大切にする」という言葉を添えている。

また、上部には「外国の子も一緒に」という言葉と共に、手と手を取り合う絵が描かれてい



る。同じクラスの子どもが、「一緒に遊ぼうよ」と外国につながる子どもの手を引いている様子を表現している。保育士が描かれていないのは、外国につながる子どもと一緒に遊ぼうということ教えるのではなく、自然に、子どもたちの中から生まれる姿が見られるように関わっていきたく考えたからだ。年齢を重ねるごとに、子どもたちは互いの違いを認識するようになるが、保育士が外国につながる子どもにも、その保護者にも同じように接することにより、その態度が子どもたちにも伝わる。見た目や言語の差を超えて、同じクラスの友だちだという関係を、子どもたちの間でも築いていってもらいたいという願いを込めて、イメージ画を描いた。日本人の子どもであっても、外国につながる子どもであっても、同じ保育園に通っている以上は、みんな一緒に楽しく遊んでほしい。そして、楽しいからもっとこの園に通いたいと思ってもらえるような保育をしていきたいと考えている。

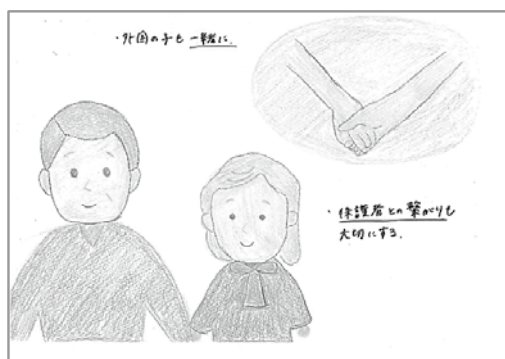


図6 Bさんがこれからの将来、大切にしているだろうこと

#### 4. 考察

##### —外国につながる子どもに対するまなざし

AさんとBさんは共に、保育士になるという夢を抱き、大学に入学し、卒業後は公立保育士として勤務している。外国にルーツを持っているかどうかという背景に違いはあるが、両者の語りには共通する点が見られた。

AさんもBさんも、①のイメージ画をめぐって、子どもと保育士という一対一の関係性をイメージしていた。そして、外国につながる子どもを、

保育者が寄り添い傍に居て、守る対象(Aさん)であり、様子を見ながら少しずつ距離を縮めていく(Bさん)ことが求められる対象として捉えていた。ここで語られるのは、園や保育士にまだ馴染めていない子どもの姿であり、その子どもの傍らで、子どもの様子を気にかけてながら、ゆっくりと子どもと関係を築いていこうとする保育士の姿である。次に、②のイメージ画をめぐって語られたのは、『『みんな一緒に、みんなそれぞれ違うし、一緒に遊べる友だちだよ』っていうのを伝えたい』(Aさん)、「同じクラスのお友だちというのを大事にしていきたい」(Bさん)という保育士としての思いだった。Aさんは「みんなで一緒に」という言葉を、Bさんは「平等に」という言葉をそれぞれ用いているが、「同じ友だち」というクラスの関係性を意識した語りに変化していることが分かる。また、保育士が外国につながる子どもを意識したり、その子ばかりに配慮をしていると、クラスの子どもたちの見方に影響を与えてしまうことに言及している点も共通している。続いて、③のイメージ画をめぐっては、「違い」に気づく年齢になった子どもたちが「違い」を理解し受容していく姿を想像した語りを含んでいた。Aさんは、保育室に置かれている人形の皮膚の色に対して、「違いに気づいたうえで大切に遊んで遊ぶ」という子どもたちの姿を、Bさんは、見た目や言語の差を超えて、同じクラスの友だちという関係を子どもたちの間でも築いていくという子どもたちの姿をそれぞれイメージしていた。

以上を踏まえると、AさんとBさんは当初、外国につながる子どもと他の子どもとの「違い」への着目があり、差異に配慮した保育や個別性を意識した保育を大切にしたいと考えていたといえる。両者は、外国につながる子どもに寄り添い、様子をみながら関係性を築いていくことを、保育士の役割として捉えていた。しかし、実際に保育士として勤務している現在は、違いよりもクラスをまとめるための「全体」への着目が強くなり、「同じであること」を意識した保育へと変化している。そこでは、誰かを特別視するのではなく、みんな平等に接することが保育士の役割として求められている。そし

て、これからの将来を見通した時、現在の「同じであること」という根っこはそのままに、子どもたち自身が「違い」に気づいたうえで、「違い」を理解し受け入れる環境づくりを意識した保育を大切にしているだろうと考えている。保育士が誘導するのではなく、子どもたちが自ら気づき、学んでいける環境を整えていくことが保育士の役割として意識されているといえる。

AさんとBさんが考える自身が大切にしているだろう将来の保育は、「同じであること」が根づいたうえで、お互いの「違い」を認め合う関係性が築かれる、望ましいものとして捉えることができるだろう。AさんとBさんが意識している「同じであること」は、「同じクラスの友だち」であることであり、言語や文化等による「違い」の、もっと以前にあるものである。そのため、どのような背景を持った子どもでも、そのままで、既に包摂されていることになる。他方、これまで指摘されてきた同質性を前提とした教育や「日本人化」につながる保育では、言語や文化等による「違い」が問題視され、マジョリティの言語や文化と「同じであること」が望ましいこととして捉えられる。そこでは、日本語や日本文化以外の言語的文化的背景を持つ子どもは、どうしても排除の状態に置かれてしまう上、その状態を変化させるためには、子どもたちに多くの負担を強いることになる。

しかし、「同じであること」が根っこにあっても、言語や文化等の「違い」があることは変わらず、両者が向かう先は同じではないかという考えが出てくるかもしれない。本稿ではそれでもなお、両者を区別したい。それは、「同じであること」や「違い」に対するまなざしが異なると考えるからである。高橋（2021）が行った調査によると、小中学校の教員は、子どもたちの母語や母文化を維持することを望ましいと考えている一方、学校等にある既存の規範や慣習は当然の「ルール」とし、身につけた方が良いという見方に立っていたという。「ルール」自体は問い直されないことから、「教員はその意図にかかわらず、マジョリティ中心の規範で構成されている日本社会を維持・再生産することに加担していると言える」（p.58）と指摘されている。これに対して、AさんとBさんの語りにあ

るのは、子どもが自らのタイミングで働きかけてくれるのを、傍らに居て見守るまなざしであり、根っこを広く張った「同じクラスの友だち」という安心できる環境を整える中で、子どもたちが互いの「違い」を認め合うことを願うまなざしである。「違い」は誰かと誰かを区別するものというよりも、子どもたちを構成する一部として位置づいており、その子を理解するための材料として用いられる。そのため、「違い」に力の差がつけられたり、優劣の判断がされることにより、誰かの「違い」が排除されることはなく、「違ったままで」誰もが包摂されることが可能になる社会だといえる。

このように「同じであること」を根っこに据えたまなざしは、現在の学校生活の中で、言語や文化等の「違い」により、いわゆる取り出し授業に参加するために、一部通常学級から離れて日本語等を学ぶ子どもにとっても、一度クラスを離れても、安心して戻れる場所がクラスの中に確保されているという意味で、心の支えになるのではないだろうか。ただし、「同じであること」に安心し、「違い」から生まれる個別の課題が見過ごされていないか、子どもの声が汲み取られていくためにどのような配慮や具体的な工夫が必要かについては、継続的に検討していくことが求められるだろう。それは、外国につながる子どもだけでなく、一斉授業を中心とする学校教育から取りこぼされる子どもたちが多く存在する中で、「同じであること」を基盤に、どのように「違い」を活かし、子どもの可能性を伸ばしていけるのかを検討することでもある。見えてきた一人ひとりの「違い」に目を向け、丁寧に対応することがなければ、すぐに誰かの「違い」が排除され、見えない存在となってしまう子どもたちが出てくる恐れがある。「違ったままで」誰もが包摂される社会の実現のために、保育や学校現場だけではなく、ともに社会を担う私たち一人ひとりの子どもたちに対するまなざしが問われている。

## 5. まとめ

本稿では、①イメージ画の描出と、②イメージ画を手がかりに行ったインタビュー調査から、外国につながる子どもを保育した経験のある保育士が、保育の中で大切にしていることを過去—現在—未来の3つの時間軸において描きだし、その変化を分析した。その結果、外国につながる子どもと他の子どもとの「違い」へ着目した保育から、クラスをまとめるための「全体」へ着目した「同じであること」を意識した保育へと変化していること、さらに、「同じであること」を根っこに「違い」を包摂する保育を志向するという変化の過程が明らかになった。「同じであること」を根っこに「違い」を包摂する保育は、子どもたちの傍らに居て見守るまなざしや、根っこを広く張った「同じであること」という安心できる環境を整える中で、子どもたちが互いの「違い」を認め合うことを願うまなざしに支えられている。このように「同じであること」を根っこに据えたまなざしは、さまざまな「違い」により、学校教育の中で取りこぼされがちな子どもたちが、安心して戻れる場所を確保することを可能にすると考えられる。「違い」が排除されることなく、「違ったままで」包摂され、子どもたちが見えない存在となることがないように、私たち一人ひとりのまなざしのあり方が問われているといえる。

最後に、今後の課題を述べる。今回取り上げたのは、保育士2名のみの語りであったため、今後、さらなるデータの収集と分析を行う必要がある。加えて、両名共に20代の女性であり、年齢層や性別等が結果に影響していた可能性がある。年齢層や性別等が異なる保育士や保育士以外の人を対象とした研究を蓄積していくことで、外国につながる子どもに関わる人たちのまなざしを比較分析し、考察を深めていくことが可能になると考えられる。

## 【謝辞】

お忙しい中、調査にご協力くださったAさんとBさんに心から感謝申し上げます。

## 【付記】

本研究は、JSPS科研費JP21K00629の助成を受けて行われた研究成果の一部である。また本稿は、その一部を言語文化教育研究学会第9回年次大会にて発表している。

## 【注】

- 1) 「外国につながる子ども」には、国籍や使用言語に関係なく、外国にルーツのある家族がいたり、日常的に外国語を使用する家庭環境にいる子どもを含む。
- 2) 語りは、読みやすさを考慮し、一部、接続詞やフィラー等を省いて記述している。

## 【引用文献】

- 太田晴雄 (2000). 『ニューカマーの子どもと日本の学校』 国際書院.
- 小内透 (2003). 『在日ブラジル人の教育と保育：群馬県太田・大泉地区を事例として』 明石書店.
- 渋谷真樹 (2013). 「ルーツからルートへ—ニューカマーの子どもたちの今—」 『異文化間教育』 37, 1-14.
- 志水宏吉・清水睦美編著 (2001). 『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐる』 明石書店.
- 高橋史子 (2021). 「移民児童生徒に対する教員のまなざし：多文化社会における社会科を問う」 恒吉僚子・額賀美紗子編 『新グローバル時代に挑む日本の教育：多文化社会を考える比較教育学の視座』 東京大学出版会, 47-60.
- 恒吉僚子 (1996). 「多文化共存時代の日本の学校文化」 堀尾輝久ほか編 『学校文化という磁場 (講座学校 第6巻)』 柏書房, 215-240.
- やまだようこ (2018). 「ビジュアル・ナラティブとは何か」 『N：ナラティブとケア』 9, 2-10.
- 横山草介・関山隆一 (2020). 「保育者の実践観の変容に関するビジュアル・ナラティブアプローチ」 『保育学研究』 58 (2-3), 155-166.